



アイヌ文化のことをもっとも話したい!  
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で  
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。



今月のテーマ

モユク(タヌキ)  
本田優子(札幌大学教授)



## タ

又キのアイヌ語はモユク。モロ小さな、ユクII獲物という意味です。モユクと言えば、萱野茂かやのしげる『アイヌと神々の謡うた』などにも載っているカムイユカラしんまう(神謡)が有名。ちよつとあらすじを、紹介しますね。

私はおじいさんと暮らしていた。おじいさんはずっと寝てばかり。ある日のこと、おじいさんが言った。「私は歳をとったのでアイヌのところへ客として行きたくなくなった。古い土を内側に入れ、新しい土を外側に出しなさい」。村おさの息子たちがやつて来て矢を射たので、私たちは客として村に行つた。火の女神が私たちをもてなしてくれた後、おじいさんが私に言った。「人間の国では山盛りのご馳走と一緒に、私たちの肉や脂がお椀に盛られているが、決してなめたりしてはいけませんよ」。なのに私は少しの脂身をなめてしまった。おじいさんは私を叱り、「自分の肉を食べた者は神の国には帰れないのだ。お前にはこれから、人間の家の入り口を守る神、さらには人間の病気を治す神になつてもらおう」と言つて一人だけ神の国に帰つてしまった。私はそれから戸口の神として、人間の病気を治したり、病人が出てあまり重体にならないように人々を守っているのだ。



イラスト/山丸ケニ

この主人公はモユクで、おじいさんはクマ。道東ではモユクはクマの叔父さんや叔母さんと言われて結構丁寧に扱われるのに、日高など道内西部では召使いのようなボジションみたい。この物語でも、顔に炭をつけてクマ神の飯炊きをしている小さな女の子とされていきます。実際にタヌキはクマの冬眠穴と一緒に冬ごもりしていることが多いので、こういうお話が生まれたんでしょうね。

この物語にはアイヌの伝統的な考え方があちこちに見られます。たとえば、クマのおじいさんが「客として人間の村に行く」のは儀式で魂をカムイの国に送ってもらうため。カムイたちは自ら望んで人間の獲物となるのです。「古い土を内側に入れ新しい土を外側に出す」のは、わざと目立つようにして人間を呼び寄せるため。カムイたちは自ら望んで人間の獲物となるのです。

ところで、この物語の翻訳にはモユクを「むじな」と書いている場合が多いのです。むじなって何?と調べると、アナグマと書いてあることが多く、タヌキじゃないじゃん!と混乱する人も。でも北海道にはアナグマはいないので、むじなはタヌキのことですから安心を。タヌキだけにちよつと化かされますね(笑)。



次回のテーマは「ケレ(靴)」  
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)  
が担当します。



ウポポイ  
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK  
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分



ウポポイPRキャラクター  
「トウレツボン」

- 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
- 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
- 山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

